

原著論文

構造-表示方法説から見たランガナタンとヴィッカーリーのファセット概念

Concept of Facet of Ranganathan and Vickery from the Viewpoint of Structure-expression Style Theory

緑川信之

Nobuyuki MIDORIKAWA

Résumé

Purpose: This study discusses three research questions from the viewpoint of structure-expression style: (1) what is the concept of “facet” proposed by Ranganathan, (2) how did Ranganathan and Vickery consider the relationship between analytic-synthetic classification and faceted classification, and (3) how did Ranganathan and Vickery consider the relationship between facet and fundamental category (or common facet).

Method: In a previous paper, the present author investigated each work of Ranganathan in chronological order. This paper reanalyzes the results obtained in the previous paper based on the theory of structure-expression style. This theory distinguishes two kinds of categorization methods of classification systems: one is by structure, either hierarchical or multi-dimensional, and the other is by expression style, either enumerative or synthetic. The writings of Vickery are also investigated and compared with those of Ranganathan based on the same theory.

Results: The concept of Ranganathan’s facet is “totality of the classes.” Although this concept itself is simple, a current misunderstanding is that facet may be used in combination with “notation consisting of plural independent elements,” because both of these are adopted in the Colon Classification. Notation consisting of plural independent elements has also been confused with “composition of class numbers.” These three concepts should be distinguished definitively based on the theory of structure-expression style. These confusions influenced the later works of Ranganathan as well as the entire body of work of Vickery.

緑川信之：筑波大学図書館情報メディア系 305-8550 茨城県つくば市春日 1-2

Nobuyuki MIDORIKAWA: Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba
e-mail: midorika@slis.tsukuba.ac.jp

受付日：2013年7月19日 改訂稿受付日：2013年12月24日 受理日：2014年1月8日

目次

- I. はじめに
- II. 構造-表示方法説
 - A. 階層構造と多次元構造
 - B. 列挙表示と合成表示
- III. Ranganathan のファセット概念
 - A. 区分肢の総体としてのファセット
 - B. ファセットと独立要素から成る記号法
 - C. 記号の合成と独立要素から成る記号法
- IV. 分析合成型分類法とファセット化分類法
 - A. Ranganathan
 - B. Vickery
- V. ファセットと基本カテゴリー
 - A. Ranganathan
 - B. Vickery
 - C. 基本カテゴリーと共通ファセット
- VI. おわりに

I. はじめに

筆者は先の論文「ランガナータンにおけるファセット概念の展開」¹⁾(以下、「ランガナータン論文」)において、(1)Ranganathan の提唱したファセット概念とは何か、(2)Ranganathan はファセットと基本カテゴリーの関係をどのようにとらえていたのか、(3)Ranganathan は自身の提唱する分析合成型分類法と Classification Research Group (以下、CRG) が提唱するファセット化分類法との関係をどのように考えていたのか、という問を立て、この問題に関して Ranganathan の著作を逐次的に検討した。

この背景には、分析合成型分類法とはみなされていない分類法にも「合成」の機能が備わっていることや、ファセット化分類法とはみなされていない分類法でも「ファセット」という用語が使われていることなどから、「ファセット」も「合成」もそうでない分類法と区分するための用語として適切なのかという疑問があった。また、Ranganathan 自身は分析合成型分類法とファセット化分類法を同義とはみなしていないが、最近の分類論または組織化論のテキストブックでは

両者を同義であるとしている場合が多い。それはなぜなのか。その一方で、分析合成型分類法・ファセット化分類法ではない分類法として階層構造分類法と列挙型分類法があげられ、この2つの用語も同義として扱われることが多いが、「階層構造」と「列挙型」という語が同じ意味内容をもっているとは考えにくく、なぜ両者が同義として扱われるのかも疑問であった。

筆者は、分類法の種類の呼び方にこのような混乱があるのは、単に名付けの問題ではなく、分類法の種類分けの方法に問題があるからではないかと考え、分類法を種類分けする際は構造と表示方法を明確に区別すべきであると以前から主張してきた²⁾。構造という面から見れば階層構造分類法と多次元構造分類法に区分でき、表示方法という面から見れば列挙表示の分類法と合成表示の分類法に区分できる。詳しくは第II章で説明するが、この考え(便宜上、「構造-表示方法説」と呼ぶことにする)によれば、階層構造分類法と列挙型分類法(列挙表示の分類法)はまったく異なる概念である。また、分析合成型分類法とファセット化分類法は、どちらも多次元構造分類法に該当する概念のように見える一方で、合成表示の分類法と

いう意味も含まれているように思われる。

この分類法の種類に関する問題の他に、ファセットと基本カテゴリーの関係が明確ではないという問題もあった。Colon Classification (以下、CC) のファセット式では Personality, Matter, Energy, Space, Time が使われているが、これらはファセットではなく基本カテゴリーと呼ばれている。その一方で、Personality ファセットなどという呼び方をする場合もある。

以上の問題意識から、上記の「ランガナータン論文」において冒頭に記した3つの問を立て、Ranganathan 自身の考えを考察した。しかし、「ランガナータン論文」では Ranganathan 自身の考えの変遷を追うことに重点をおいたため、「構造-表示方法説」による考察はほとんど行わなかった。本論文では、「ランガナータン論文」で得られた結果を基にして、同じ3つの問に関して「構造-表示方法説」に基づく分析を行った。「ランガナータン論文」と一部重複することをご了承いただきたい。

一方、現在の分類論や組織化論のテキストブックにおけるファセット概念の記述には、Ranganathan だけでなく CRG も大きな影響を与えたことが知られている。たとえば、Spiteri は、“図書館情報学 (LIS) の分野においては、ファセット分析の理論の発展は2つの源に負っている: S. R. Ranganathan と Classification Research Group (CRG) である”³⁾[p. 1-2] と述べている。CRG は、1948年に開催された Royal Society 主催の Scientific Information Conference における勧告に基づいて設置された委員会が、図書館員やドキュメンタリストを集めて分類法の問題を検討させることを決定し、1952年2月に設立されたグループである⁴⁾。情報検索のための主題索引法に関心をもち、主題索引法の重要なツールとして分類法の研究を行った。

この CRG の中心的人物が Vickery で、設立メンバーの人選にも関わり、1960年にロンドンを離れるまで幹事として活動した⁵⁾。Vickery は、CRG の設立宣言と呼ばれる「Classification Research Group」というタイトルの1953年の論

文⁴⁾をはじめ、分類法関係の論文を多数執筆している。なかでも、1955年の「The need for a faceted classification as the basis of all methods of information retrieval」というタイトルの論文⁶⁾は、CRG を代表してファセット化分類法を支持することを明確に述べている。この論文の著者名は CRG になっているが、実質的には Vickery が執筆したことが認められている⁷⁾。その他にも、1960年の *Faceted Classification: A Guide to Construction and Use of Special Schemes*⁸⁾ や 1966年の *Faceted Classification Schemes*⁹⁾ のように、タイトルに「ファセット化分類法」という名称を含む著作を執筆している。また、1958年に出版された *Classification and Indexing in Science*¹⁰⁾ という著作はファセット化分類法のテキストブックとして大きな影響を与え、1975年の第3版¹¹⁾まで改訂されている。こうしたことから、CRG のなかでも Vickery が現在のテキストブックにおけるファセット概念の記述に最も大きな影響を及ぼしていると考えられる。

そこで本研究では、Ranganathan と対比しながら、ファセット概念に関する Vickery の考えも「構造-表示方法説」の視点から検討した。ただし、本稿で採り上げる Vickery の著作は *Classification and Indexing in Science* の第3版 (1975年)¹¹⁾ までとする。Vickery は晩年 (2009年没) まで分類法に関する著作を執筆しているが、現在のテキストブックに影響を与えたのは、主として1950年代、60年代の著作であり、上記の著作はその集大成といえる。また、Ranganathan の分類法に関する最後の著作¹²⁾ が1969年であるから、Vickery についても1975年の著作までとするのは妥当であろう。本稿は Vickery の分類法に関する著作を網羅的に検討するものではないことをお断りしておく。

ここで、訳語に関して若干の説明をしておく。まず、faceted classification についてである。日本の大部分の著作において「ファセット分類法」と訳されているが、本稿では名詞的用法以外に、「よりファセット化した」や「ファセット化された」という表現も使うので、これらと整合性を

とるために「ファセット化分類法」という訳語を用いた。次に、classification についてである。単独で使用するときは「分類」と「分類法」を文脈で訳し分けた。また、直接引用や間接引用では原文の classification schedule を「分類表」、classification scheme と classification system を「分類法」と訳し分け、それ以外では「分類法」とした。

II. 構造-表示方法説

前章で述べたように、分類法を種類分けする際に構造と表示方法という2つの観点があることは、すでにいくつかの著作で論じてきた。ここでは本稿を理解する上で必要な点を説明する。詳しくは拙著¹³⁾を参照頂きたい。なお、筆者の過去の著作では「区分原理」を使用したこともあるが、本稿では Ranganathan や Vickery の用語に合わせて「区分特性」を使用する。

A. 階層構造と多次元構造

分類法を構築する際は複数の区分特性を適用するが、それらの区分特性をどのように組み合わせるかで分類法の構造が異なる。組み合わせ方は種々考えられるが、区分特性を順番に適用するかそれとも独立に適用するかの2つが基本である。

1. 階層構造

区分特性を順番に適用すると階層構造となる。たとえば、人間という対象に血液型と性別という2つの区分特性をこの順序で適用すると、まず「人間」が血液型で区分されてA型からO型までの4つの区分肢ができ、次に、それらが性別で区分されて「A型の男性」など8つの区分肢ができる。「A型」は「人間」の下位概念で、「A型の男性」は「A型」の下位概念である。このように、区分特性が適用されるたびに下位概念が形成されていき、階層的な構造となる(第1図)。なお、第1図の項目名は上位項目の内容が省略されている。すなわち、「A型」は「A型の人間」を意味する。同様に、「A型」の下位の「男性」は「A型の男性という人間」を意味す

人間
A型
 男性
 女性
B型
 男性
 女性
AB型
 男性
 女性
O型
 男性
 女性

第1図 階層構造分類法

る。

階層構造では、区分特性の適用順序を変えると異なる体系になる。上の例で、血液型と性別という区分特性の適用順序を入れ替えると、先ほどとは異なる体系が得られることは明らかである。

2. 多次元構造

区分特性を独立に適用すると多次元構造となる。たとえば、人間という対象に血液型と性別という2つの区分特性を独立に適用すると、一方で人間を血液型で区分してA型からO型までの4つの区分肢ができ、他方で性別で区分して男性と女性の2つの区分肢ができる。さらに、両者の区分肢を組み合わせると、「A型:男性」など $4 \times 2 = 8$ 通りの区分肢ができる(第2図)。

各区分特性による区分肢はどちらが上位・下位ということはなく、独立している。そこで、たとえば、血液型を縦軸上にとり性別を横軸上にとる座標の形式で示すことも可能である(縦軸と横軸の区分特性を逆にしてもかまわない)。2つの区分特性を組み合わせる値、たとえば「A型:男性」は縦軸上の「A型」と横軸上の「男性」の交点に位置づけられる。このような座標軸を用いた表現が可能なので、筆者はこれを多次元構造と名づけた。

人間

〔血液型〕 A型, B型, AB型, O型

〔性別〕 男性, 女性

〔血液型×性別〕 A型: 男性, B型: 男性, AB型: 男性, O型: 男性

A型: 女性, B型: 女性, AB型: 女性, O型: 女性

第2図 多次元構造分類法

3. 複合主題への対応

階層構造と多次元構造の相違が明確に現れる1つの例は、複合主題への対応である。これまでの例と同様に、人間を血液型と性別という2つの区分特性で区分してつくる分類法を考えてみる。

階層構造の場合は、血液型、性別の順に区分特性を適用すると、第1図のようになる。この分類法には、A型からO型までの4つの区分肢と、さらにそれぞれを血液型で区分してできる「A型の男性」など8つの区分肢が存在する。しかし、「男性」と「女性」という内容の区分肢は存在しない(1項で述べたように、第1図の項目名は上位項目の内容が省略されている)。つまり、この分類法では、血液型によらない「人間の男性」や「人間の女性」という主題を表現することができない。

区分特性の順序を入れ替えて性別で先に区分しその後で血液型で区分すれば、「男性」と「女性」という内容の区分肢ができる。しかし、今度はA型からO型までの4つの区分肢が存在しなくなる。つまり、この分類法では、性別によらない「A型の人間」などの主題を表現することができない。

以上のように、階層構造の分類法では複合主題の表現に限界がある。それに対して、多次元構造の場合は、第2図でわかるように、A型からO型までの4つの区分肢も、「男性」と「女性」も存在する。そして、それらを組み合わせた区分肢も存在する。

このように、階層構造よりも多次元構造の方が複合主題に対応しやすい。これは、階層構造は区分特性の適用順序が定まっているので、順序によっては表現できない主題がでてくるのに対して、多次元構造は区分特性を独立に適用するの

で、階層構造よりも区分特性の組み合わせが柔軟で、主題の表現力が高いからである。

B. 列挙表示と合成表示

分類法には2種類の表示方法がある。1つは、すべての区分肢を最初から表示する方法で、これを列挙表示と呼ぶ。もう1つは、必要な区分肢だけを表示しておいて、残りの区分肢は表示されている区分肢を合成して作る方法で、これを合成表示と呼ぶ。この2種類の表示方法は、階層構造の分類法と多次元構造の分類法のそれぞれに適用される。

1. 階層構造の列挙表示と合成表示

階層構造の場合の列挙表示は、第1図のように、階層の各段階における区分肢をすべて表示する方法である。

合成表示は、同じ区分特性によって同じ区分肢が複数箇所にできる場合、1箇所だけ残して他は表示しない、ということを行う。その際、残す場所を元の表の中にするか外に出すかで2種類の方法がある。

第1図の列挙表示の表で4箇所に存在する「男性」「女性」という区分肢を、A型の下位項目としてのみ残し、B型、AB型、O型の下位項目からは削除する。そして、B型、AB型、O型では「A型と同様に区分しなさい」という合成指示だけを記載する。この指示によって、「B型の男性」という主題を表現する区分肢は、「B型」の下をA型の下位項目と同様に性別で区分して得ることができる。つまり、「B型」と「男性」の合成をしたことになる。

もう1つは、「男性」「女性」という区分肢を元の表からすべて削除し、別の表とする方法であ

る。元の表を本表、外に出した別の表を補助表と呼ぶ。「B型の男性」という区分肢は、本表の「B型」と補助表の「男性」を合成してつくる。

階層構造の合成表示は、各区分特性によってできる区分肢を合成しているため、多次元構造と似ている。しかし、多次元構造の場合は区分特性を独立に適用するのに対して、階層構造では区分特性の適用順序は決められている。たとえば、本表と補助表の区分肢を合成する場合、本表の区分肢（たとえば「B型」）に補助表の区分肢（たとえば「男性」）を合成するのであって、その逆はできない。階層構造の合成表示は、列挙表示ならば表示されているはずの区分肢を、合成によって再現する作業である。列挙表示で表示されていない区分肢は合成によっても表示することはできない。したがって、合成表示をしても複合主題への対応は列挙表示と変わりがない。

2. 多次元構造の列挙表示と合成表示

多次元構造の場合の列挙表示は、第2図のように、各区分特性でできる区分肢とそれらを組み合わせさせた区分肢をすべて表示する方法である。

多次元構造の合成表示は、各区分特性でできる区分肢（便宜上、基本区分肢と呼ぶことにする）だけを残し、それらを組み合わせさせた区分肢を削除したものである。第2図でいえば、血液型と性別の区分肢が基本区分肢として表示され、血液型と性別を組み合わせさせた血液型×性別の区分肢は削除される（表示されない）。削除された区分肢は、利用者が自分で基本区分肢を合成して作成する。たとえば、「A型の男性」という主題は、血液型から「A型」を選び、性別から「男性」を選んで、それらを合成して「A型：男性」とすることで表現できる。

多次元構造の合成表示も、列挙表示ならば表示されているはずの区分肢を、合成によって再現する作業である。列挙表示で表示されていない区分肢は合成によっても表示することはできない。したがって、多次元構造の場合も、複合主題への対応は列挙表示と合成表示とで変わりがない。

III. Ranganathan のファセット概念

A. 区分肢の総体としてのファセット

後にファセットと呼ぶことになる考え方（ファセット概念）を初めて意識的に提唱したのは、Ranganathan の CC 第1版（1933年）¹⁴⁾である。ここではまだ区分特性（characteristics）と呼ばれている。第3図の例では、「2 図書館学」というクラスを、問題特性（problem characteristics）と図書館特性（library characteristics）でそれぞれ細分する。たとえば、「国立図書館における閲覧室」という主題は、問題特性に基づいて区分すると細目「13 閲覧室」が得られ、図書館特性に基づいて区分すると細目「11 国立図書館」が得られる。そして、これらの分類記号を連結記号であるコロン（:）を使って合成すると、「213:11」となり（「図書館学」というクラスを表す記号「2」の後ろにはコロンを使わない）、これが「国立図書館における閲覧室」という主題を表現する。

CC 第2版（1939年）¹⁵⁾では、クラスを表す記号と各区分特性によって区分されてできる細目を表す記号を合成する方法を、2[P]: [L] というように式で表示している。1944年の著作¹⁶⁾でこ

2 LIBRARY SCIENCE

Divisions based on Problem or P Characteristic

- 1 Building and equipment
- 11 Stack room
- 12 Catalogue room
- 13 Reading room
- ...

Divisions based on Library or L Characteristic

- 1 National and similar libraries
- 11 National library
- 12 Central library
- 13 Copyright library

第3図 Colon Classification 第1版の例¹⁴⁾

2 LIBRARY SCIENCE

2 [P]: [L]

*Foci in***Problem or P***Facet*

1 Building and equipment

11 Stack room

12 Catalogue room

13 Reading room

. . . .

*Foci in***Library or L***Facet*

1 National and similar libraries

11 National library

. . . .

2 Public library

21 Rural library

25 City library

第4図 Colon Classification 第3版の例¹⁷⁾

の式を「区分特性の式」と呼んでいる。なお、Ranganathan がファセットという用語を初めて使用したのもこの著作である。

CC 第3版 (1950年)¹⁷⁾では、CC 第1版で区分特性と呼ばれていた部分がファセットと呼ばれるようになる。すなわち、第3図で「Divisions based on Problem or P Characteristic (問題特性によって区分されてできた細目)」という表記であったものが、第4図のように「Foci in Problem or P Facet (問題ファセット内の細目)」という表記になる(「Foci」は第3図の「Divisions」に対応し、「細目」を意味する)。第4図の表記をより正確に書けば、「Foci in Problem or P Facet divided by Problem or P Characteristics (問題特性によって区分されてできた問題ファセット内の細目)」となるであろう。すなわち、問題特性によって区分されてできた細目の全体(総体)が問題ファセットである。Ranganathan も、「区分特性の系列に基づく、あるメインクラスまたはカノニカルクラス¹⁸⁾の区分枝の総体は、その[クラスの]ファセットの1つを構成する」¹⁷⁾[pt. I: p.

41] と、ファセットを定義している。

上記のファセットの定義を、問題ファセットの例を入れて書き直してみると、下記のようになる(煩雑さを避けるために、メインクラスとカノニカルクラスを単にクラスと呼ぶ)。

あるクラス (Library Science) を、ある区分特性 (Problem Characteristics) の系列で区分してできた区分枝の総体 (1 Building and equipment, 11 Stack room, 12 Catalogue room, 13 Reading room など) が、ファセット (Problem Facet, 略して P Facet) である

要するに、「区分枝の総体」がファセットである。ただし、どのような区分枝の集まりでもよいわけではなく、「ある特定の区分特性」によって区分されたものでなければならない。たとえば、ある分類法で「図書館」というクラスの下に「学校図書館」、「公共図書館」、「大学図書館」、「貸出返却業務」、「レファレンス業務」、「目録業務」という区分枝があるとする。このうち、「学校図書館」、「公共図書館」、「大学図書館」は図書館の種類(館種)という区分特性で区分されてできる区分枝であり、「貸出返却業務」、「レファレンス業務」、「目録業務」は図書館の業務という区分特性で区分されてできる区分枝である。前者と後者は異なる区分特性によってできる区分枝であるから、これらをすべて集めてもファセットにはならない。図書館の種類という区分特性によってできる区分枝だけを集めれば「図書館(の種類)ファセット」となり、図書館の業務という区分特性によってできる区分枝だけを集めれば「(図書館の)業務ファセット」となる。

このように、Ranganathan の定義によるファセットとは、「ある特定の区分特性によって区分されてできる区分枝の総体」である。しかし、この意味でのファセットならば、CC 以前の分類法ですでに使われていた¹⁹⁾。

Ranganathan 自身も Dewey Decimal Classification (以下、DDC) にファセットが存

在することを認めている。彼は、DDCの第14版には「表3 言語と文学」と「表4 言語区分」があり、表3にリストされている言語の項目および文学の項目は、表4にリストされている言語区分の分類番号を加えることで細分できることを説明している¹⁶⁾。たとえば、表3の「429.7 アラビア語」に表4の「1 正字法」を加えると「429.71 アラビア語の正字法」ができる。そして、これを「ファセット分析」と呼んでいる。

B. ファセットと独立要素から成る記号法

1. ファセットと助記性

「区分枝の総体」という意味でのファセットは、助記性を高めるという目的に適っていた。RanganathanはCC第1版で次のように述べている（ここで使われている「原基表」とは、各区分特性によってできる区分枝の表（第3図の問題特性に基づく細目や図書館特性に基づく細目）のことで、後にファセットと呼ばれることになる）。

トピックに対して既製の分類番号ではなく原基表 [の番号] を与えるこの方法の1つの自然な結果が、分類法が獲得した並はずれた助記性である。¹⁴⁾ [p. xiii-xiv: 角括弧は筆者の補足, 以下同様]

これは、ある区分特性に基づく区分枝の集合が何度も繰り返し使われることを想定している。たとえばCC第1版では、「2 図書館学」クラスにおいて、問題ファセットの区分枝と図書館ファセットの区分枝が組み合わされる。一方のファセットの区分枝が複数存在し、そのそれぞれにもう一方のファセットの区分枝集合が適用される。つまり、もう一方のファセットは複数回適用される。このように、同じ区分特性で区分された同じ区分枝を繰り返し使用することによって助記性が高められる、ということである。

このように、ファセット単独の意義は助記性を高めるということであった。しかし、CCはファセットを導入するとともに、もう1つの重要な工夫も行っていた。

2. 独立要素から成る記号法

CCのもう1つの工夫は、独立要素から成る記号法である。分類法の記号法は大きく分けると、単一要素から成る記号法と独立要素から成る記号法がある。一般に、分類項目を細分する際は右側に記号の桁を延ばす（展開する）。単一要素から成る記号法の場合は桁を延ばせる箇所が1箇所であるのに対して、独立要素から成る記号法の場合は複数箇所を延ばすことができる。

たとえば、単一要素から成る記号法では、

8 文学
83 ドイツ語の文学（言語で細分）
832 ドイツ語の戯曲（文学形式で細分）

というように、最右端の側に記号を展開して細分する。この例では、ドイツ語の文学83は文学形式で細分している。そのため、ドイツ語の文学83をさらに言語で細分することはできない。すなわち、

8 文学
83 ドイツ語の文学（言語で細分）
83? 低地ドイツ語の文学（さらに言語で細分）

とすることはできない。

一方、独立要素から成る記号法では、

8 文学
83 ドイツ語の文学（言語で細分）
83:2 ドイツ語の戯曲（文学形式で細分）

というように、区分特性ごとに細分することができる。そのため、ドイツ語の文学83をさらに言語で細分して低地ドイツ語の文学839とすることが可能である。さらに、文学形式による細分と組み合わせ、

8 文学
83 ドイツ語の文学（言語で細分）

83:2 ドイツ語の戯曲（文学形式で細分）

839:2 低地ドイツ語の戯曲（言語で細分）

とすることもできる。

以上見てきたように、独立要素から成る記号法をもつ分類法は、単一要素から成る記号法をもつ分類法よりも複合的な主題に対応しやすい、ということがいえる。CCは、複合的な主題に対応するために、独立要素から成る記号法を採用したのである。

これらの独立要素から成る記号法をもつ分類法と単一要素から成る記号法をもつ分類法は、構造-表示方法説による多次元構造分類法と階層構造分類法にそれぞれ対応する。多次元構造分類法では、各区分特性による区分肢が独立に組み合わせられる。これを表現する手段が独立要素から成る記号法である。階層構造分類法では、各区分特性が順番に適用され、ある区分特性の記号は先に適用された区分特性の記号に従属する。つまり、単一要素から成る記号法が使用される。独立要素から成る記号法をもつ分類法の方が単一要素から成る記号法をもつ分類法よりも複合的な主題に対応しやすいのも、第II章で見たように、多次元構造分類法が階層構造分類法よりも複合主題に対応しやすいことと一致している。

3. ファセットと独立要素から成る記号法の一体化

CCにおいては、各ファセットが独立して与えられる。すなわち、各ファセットの記号が独立に組み合わせられる。このため、ファセットを導入することと、独立要素から成る記号法を採用することが一体化している。本節1項で見たように、ファセット単独の意義は助記性を高めることであったが、CCにおいてファセットが独立要素から成る記号法と一体化したために、ファセットも複合主題に対応するための手段であるかのような印象を与えてしまったと考えられる。

区分肢の総体としてのファセットは、多次元構造分類法だけでなく、階層構造分類法にも存在しうるし、実際、A節で見たように、DDCなどの階層構造分類法にも存在している。そして、ファ

セット単独では複合主題への対応に影響を及ぼすことはない。複合主題への対応に影響を与えるのは、独立要素から成る記号法か単一要素から成る記号法か、すなわち、多次元構造分類法か階層構造分類法かである。

C. 記号の合成と独立要素から成る記号法

ファセット概念を混乱させるもう1つの要因として考えられるのは、独立要素から成る記号法と記号の合成との混同である。記号の合成はDDCなど単一要素から成る記号法をもつ分類法でも採用されている。

たとえば、DDC第1版²⁰⁾では、「557北アメリカの地質学」に「978メキシコ（の歴史）」の末尾「8」を合成して、「5578メキシコの地質学」とすることができる（第1版では小数点を使用していない）。これは、独立要素から成る記号法と同じことをしているように見える。しかし、DDCは単一要素から成る記号法を採用しているのであり、上記の例も「北アメリカの地質学」の記号557の右端の桁を延ばして5578としているにすぎない。すなわち、独立要素から成る記号法のように557と8が独立に組み合わせられているのではない。

一方、Universal Decimal Classification²¹⁾（以下、UDC）では、「622.33炭坑業」に形式区分の補助表の記号「(021)ハンドブック」を合成して、「622.33(021)炭坑業ハンドブック」という主題を表現することができる。これは独立要素から成る記号法となっている。すなわち、622.33も(021)も、それぞれ独立に細分することができる。

このように、記号の合成と独立要素から成る記号法とは、それぞれ別の概念である。しかし、独立要素から成る記号法の場合、各要素の記号を組み合わせることを行っており、これが記号の合成との混同を誘発したと考えられる。これを構造-表示方法説の用語で言い換えれば、多次元構造分類法（独立要素から成る記号法をもつ分類法）と合成表示の分類法（記号の合成を行う分類法）とを混同している、ということになる。合成表示

は、多次元構造分類法であるか階層構造分類法であるかには関係がなく、どちらでも可能である。

B節3項で見たファセットと独立要素から成る記号法との（CCの中での）一体化という歴史的要因と、多次元構造分類法と合成表示の分類法との混同という理論的要因が相乗して、第IV章と第V章で見ると、ファセット関連概念の混乱が生じたのではないかと考えられる。

IV. 分析合成型分類法と ファセット化分類法

A. Ranganathan

1. 列挙型分類法の対極としての分析合成型分類法

Ranganathan が、合成ができる分類法を合成型分類法 (synthetic classification) と呼んだ²²⁾のは、1937年の *Prolegomena to Library Classification* の第1版²³⁾ (以下、Prolegomena 第1版) である。異なる区分特性に関連する部分ごとに分類記号をコロンの区切ることによって複合主題への柔軟性を高めたのが、合成型分類法である CC の利点であると述べていることから、合成型分類法は独立要素から成る記号法をもつ分類法を指していることがわかる。構造-表示方法説の用語でいえば多次元構造分類法である。つまり、この著作では分析合成型分類法 (この時点ではまだ合成型分類法と呼んでいる) を多次元構造分類法の意味で捉えていると考えられる。

ところが、1949年の著作²⁴⁾では、「列挙的」という用語を導入し、それを「非列挙的または合成的」に対置している。

Wells氏によって考案された用語を使うなら、Library of Congress Classification と Decimal Classification は列挙的 (enumerative) である。すなわち、それらはすべての可能な特定主題をリストしそれに分類番号を与えようとする。…非列挙的 (non-enumerative) または合成的 (synthetic) と呼ぶべき Colon Classification では、大部分が複合的な概念から導かれる特定主題を列挙せずに、基本的な

要素的概念だけを列挙して、それらのいくつかを組み合わせて特定主題を構成する。²⁴⁾[p. 232]

つまり、この著作では分析合成型分類法 (この時点でもまだ合成型分類法と呼んでいる) と列挙型分類法を対置しているのである。構造-表示方法説に基づけば、列挙型分類法 (列挙表示の分類法) に対置されるのは合成表示の分類法である。そうだとすると、分析合成型分類法を合成表示の分類法という意味で捉えていることになる。しかし、この著作では列挙的と合成的について詳しい説明はなく、先述の Prolegomena 第1版と同様に、分析合成型分類法を多次元構造分類法の意味で捉えている可能性もある。その場合は、構造-表示方法説に基づけば多次元構造分類法に対置されるのは階層構造分類法であるから、列挙表示の分類法と階層構造分類法を混同していることになる。

Ranganathan が分析合成型分類法という用語を初めて用いたのは、1950年の著作²⁵⁾においてである。この著作では既存の分類法を、列挙型分類法 (DDC)、列挙型と分析合成型のハイブリッド型分類法 (UDC)、分析合成型分類法 (CC) の3種類に分けている。詳しい説明はないが、UDCをハイブリッド型と呼んでいるのは、UDCの基になった DDC が列挙型で、それに各種補助表やコロンの記号による記号の合成を採り入れているからであろう。ただ、列挙型分類法に対置される分析合成型分類法が、構造-表示方法説の用語でいう合成表示の分類法と多次元構造分類法のどちらを想定しているのか、この著作でも明かでない。

Ranganathan が分析合成型分類法という名称に明確な意味づけを与えたのは1957年のいわゆる Dorking 会議での発表論文²⁶⁾においてである。それは、「ファセット分析から記号の合成までの過程を可能にする分類法」という意味である。同じ年に出版された Prolegomena 第2版 (1957年)²⁷⁾でも、同じ定義を与えている。その上で、各種分類法の位置づけを示している。

知識の全領域 (universe of knowledge) の列挙型分類法においては、すべての既知の主題をほぼ網羅的にカバーするために、クラスが単一の表に列挙され、それに数個の補助表がつく場合とつかない場合がある。LCは厳密に列挙型 (severely enumerative) である。SC [Subject Classification] もそうであるが、その categorical divisions は長い補助表を形成している。DC はほぼ列挙型 (largely enumerative) であるが、その共通細目は補助表を形成している。UDC は主として列挙型 (mainly enumerative) であり、5つの補助表をもっている。…しかし、本表 (main schedule) の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。BC [Bibliographic Classification] は仮想的な列挙型 (virtually enumerative) である。しかし、それはUDCと同程度に純粹の列挙から導き出されたものである。その一般的に使われる補助表は4つである。…さらに、特定の主類で使われる41の補助表がある。…本表の長さはすべての補助表を合わせた長さよりもかなり長い。さらに、本表は、前者の補助表の助けを借りて作成されたクラスを散在させている。これは列挙型の質を向上させる。CCは列挙型からはほど遠い。それは一般的に利用するための4つの補助表 (auxiliary schedules) をもっている。[materials, place, language, time の補助表] …本表は1ページである。各主類に一組の細目表が与えられている。分類番号は、各細目表と補助表から採られた番号を集めて合成される (is synthesised)。²⁷⁾ [p. 138]

この引用から、Ranganathan は、本表が短く補助表が充実しているほど列挙型の要素が減少するとみなしていること、そして、CCは列挙型からほど遠いと位置づけていることがわかる。CCを分析合成型と呼んでいることはこれまでの著作と同様である。したがって、列挙型の対極にあるのは分析合成型ということになる。

ここで、構造-表示方法説に基づけば、列挙型分類法 (列挙表示の分類法) と対になるのは合成表示の分類法である。そして、上で見てきたように、「本表が短く補助表が充実しているほど列挙型の要素が減少する」という特徴は合成表示の説明そのものである。この点から、Ranganathan の分析合成型分類法は合成表示の分類法を指しているように思える。

しかし、その一方で、以下のようにも述べている。

分析合成型分類法に伴う自由はCCにおいて最大となる。これは、基本クラスと [ファセット内の] 細目のレベルだけに列挙を減少させたことによる。²⁷⁾ [p. 279]。

ここでは、分析合成型分類法の性格づけとして自由度の高さをあげている。自由度の高さは独立要素から成る記号法によって実現される。したがって、分析合成型分類法を構造-表示方法説という多次元構造分類法とみなしているようにもとれる。

以上で見てきたように、Ranganathan は分析合成型分類法の対極に列挙型分類法を置いているが、分析合成型分類法自体には構造-表示方法説という多次元構造分類法と合成表示の分類法の両方の性格を与えているように思われる。

2. 分析合成型分類法とファセット化分類法との関係

Ranganathan が分析合成型分類法という名称に明確な意味づけを与えた1957年のDorking会議での発表論文²⁶⁾では、公準 (postulates) という用語を初めて導入し、分析合成型分類法と公準との関係に触れている。ただし、詳しい説明はない。その後、1961年の著作²⁸⁾において、分析合成型分類法は公準と原理に基づくべきである、という結論に到達する (Ranganathan がこの結論に至った経緯については「ランガナータン論文」¹⁾を参照されたい)。そしてその後は、CRGが提唱するファセット化分類法と自身が使用してきた分

析合成型分類法との関係を明らかにすることを試みている。

1965年のいわゆる Elsinore 会議での発表論文²⁹⁾では、分析合成型分類法とファセット化分類法との関係について以下のように述べている。

もしそれが「公準と原理に」導かれた分類表なら、ファセットに関する無限の受容力「新しいファセットを挿入できるなど」を提供することができる。そのとき初めて、ファセット化された分類表は真の分析合成型の分類表となる。しかし、現在、ファセット化と分析合成型という2つの用語は、あたかもそれらが同義であるかのように大雑把に使われている。²⁹⁾ [p. 86]

このように Ranganathan は、公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法であると述べ、分析合成型分類法とファセット化分類法は同義ではないと明言している。

同じ1965年にラトガス大学で行われたセミナーの講演録³⁰⁾でも、Elsinore 会議での説明と同様、「公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法である」と述べる。その上で、さらに踏み込んで次のように述べている。

分析合成型分類法はすべてファセット化分類法であるが、ファセット化分類法のすべてが分析合成型分類法というわけではない。³⁰⁾ [p. 275]

1967年の Prolegomena 第3版³¹⁾では、「公準

と原理に導かれる」というこれまでの条件に、「自由な」という条件が分析合成型分類法に加えられる。

いかなるファセット化分類法も、それが自由なファセット化でなければ、分析合成型ではないことを強調しておく。³¹⁾ [p. 109]

そして、自由なファセット化に基づかないファセット化分類法を硬直化したファセット化分類法と呼んでいる（「自由な」や「硬直化」の意味については第V章A節を参照されたい）。

この Prolegomena 第3版までは、「公準と原理によって導かれたファセット化分類法」あるいは「公準と原理によって導かれた自由なファセット化分類法」だけが分析合成型分類法であるとしていたが、1969年の著作¹²⁾において変化が見られる。この著作では、分析合成型分類法とファセット化分類法は、それぞれ定義は異なるが結果的にはほぼ同じものを指している、と考えているように思われる。ただし、定義が異なるのであるから、分析合成型分類法とファセット化分類法はそもそも別の概念であると考えていることは従来と変わらない。

一方、既存の分類法の位置づけも著作によって微妙に変化する。一例として Prolegomena 第3版³¹⁾での位置づけを見ると第1表のようになる。なお、前項で見た Prolegomena 第2版²⁷⁾での位置づけを右欄に示した。

LCCとDDCの位置づけは Prolegomena 第2版と第3版とではほぼ同じである。UDCは、第2版では列挙型に入れられていたが、第3版ではファセット化に入れられている。これは、列挙

第1表 Ranganathanによる各種分類法の位置づけ

分類法	Prolegomena 第3版 (1967) ³¹⁾	Prolegomena 第2版 (1957) ²⁷⁾
LCC	列挙型分類法	厳密に列挙型の分類法
DDC	ほぼ列挙型の分類法	ほぼ列挙型の分類法
UDC	ほぼファセット化された分類法	主として列挙型の分類法
CC 第3版まで	硬直化したファセット化分類法	非列挙型分類法 = 分析合成型分類法
CC 第4版以降	自由なファセット化分類法 = 分析合成型分類法	

型である DDC を基にしている点を重視するか、合成の要素を豊富に採り入れている点を重視するかの違いと考えられる。CC は、Prolegomena 第 2 版ではすべて分析合成型とされていたが、Prolegomena 第 3 版ではすべてファセット化であり、その中の自由なファセット化を分析合成型と呼んでいる。つまり、① Prolegomena 第 2 版での「分析合成型分類法」が第 3 版で「ファセット化分類法」と呼ばれるようになり、② Prolegomena 第 3 版での「分析合成型分類法」は「ファセット化分類法」とは区別されているのである。現在のテキストブックにおいて、分析合成型分類法とファセット化分類法を同義として扱っているのは①の事実だけを見ているのであって、②の事実を無視していることになる。

一方、前項で見たように、ファセット化分類法という概念を使用する以前（Prolegomena 第 2 版や同時代の著作で）は、分析合成型分類法が合成表示の分類法と多次元構造分類法の両方の性格を与えられていた。これは、Ranganathan が独立要素から成る記号法（多次元構造分類法）と記号の合成（合成表示の分類法）とを混同していたからであると前項で推測した。Prolegomena 第 3 版においては、ファセット化分類法および分析合成型分類法（＝自由なファセット化分類法）が列举型分類法に対置されている。ここには、独立要素から成る記号法（多次元構造分類法）と記号の合成（合成表示の分類法）との混同だけでなく、ファセットと独立要素から成る記号法との一体化というもう 1 つの要因も関係していると思われる。すなわち、「ファセット」、「独立要素から成る記号法」、「記号の合成」という 3 つの概念が明確に区別されていないという、第 III 章でみた CC 第 1 版以来の課題を引きずっていると考えられる。

B. Vickery

1. 分析合成型分類法とファセット化分類法

A 節で見たように、Ranganathan は 1937 年の Prolegomena 第 1 版²³⁾で、合成ができる分類法を合成型分類法と呼んだ。Ranganathan が分析

合成型分類法という用語を初めて用いたのは、1950 年の著作²⁵⁾においてである。

一方、Vickery は、1950 年の著作³²⁾で合成型分類法と呼び、1953 年の著作³³⁾から分析合成型分類法と呼ぶ。そして、1955 年の著作⁶⁾で以下のようにファセット化分類法と呼ぶようになる。

細目の組を複数つくることができ、それぞれが並行する種の同質のグループとなるように、ある 1 つの類を複数の方法で細分することができる分類法の型が必要とされている。そのような分類表は、いわゆるファセット化された分類法である。⁶⁾[p. 267]

ただし、Vickery は同じ著作の中で、Ranganathan の用語として分析合成型分類法も用いている。

Ranganathan や Cordonnier が考案したような分析合成型の分類法は、主題を構成するそれぞれの用語を分類記号に変換し、そうした記号の集合体で主題を表現する。これらすべての手法が特定主題の複合的な性質を認識している。⁶⁾[p. 264]

両者を同義として扱っていることは、後の著作^{8), 11)}の中で、分析合成型分類法をファセット化分類法と言い換えていること（あるいはその逆の言い換え）からわかる。

最近 10 年間に発展した分類法の新しい様式は、その代表的人物である Ranganathan によって提唱された名称「分析合成型」あるいは「ファセット化」として知られるようになった。⁸⁾[p. 8]

ファセット化または分析合成型分類法を支持する他の人たちと同様に、Ranganathan は……¹¹⁾[p. 193]

一方、A 節で見たように、Ranganathan は分析合成型分類法とファセット化分類法は同義では

ないと主張していた。1965年の著作²⁹⁾では「公準と原理によって導かれたファセット化分類法が分析合成型分類法である」と述べ、1967年の著作³¹⁾では「公準と原理に導かれる自由なファセット化分類法」が分析合成型分類法であるとしている。また、1969年の著作¹²⁾においても、分析合成型分類法とファセット化分類法は結果的にほぼ同じものを指していると認めながらも、定義を異にする、別の概念であると考えている。

Vickeryが1955年に「ファセット化分類法」という用語を使い始め、そしてRanganathanが1965年の著作からファセット化分類法に言及を始めるのは、この10年間に「ファセット化分類法」という用語が普及したことの現れと考えられる。

Ranganathanが両者の違いにこだわったのは、VickeryらCRGによる用語の使い方への不満、あるいは、Vickeryらがファセット化分類法を支持しながらも、CCも含めて既存のファセット化分類法には批判的である(第V章B節参照)ことへの反論とも考えられるが、おそらくそれ以上に分類法に対する考え方の違いもあったと思われる。その1つが、第V章C節で検討するRanganathanの基本カテゴリーとVickeryの共通ファセットの考え方の違いである。

2. 列挙型分類法とファセット化分類法

Ranganathanと同様に、Vickeryがファセット化分類法と対置しているのは列挙型分類法である。Vickeryは階層関係(hierarchical relations)や階層木(hierarchical tree)という用語を使用している¹¹⁾が、これらはファセット化分類法におけるファセット内での階層を意味しており、構造-表示方法説の階層構造分類法のことではない(Ranganathanの著作には階層構造分類法や階層(hierarchical, hierarchies)という用語自体が、筆者の確認した範囲では見あたらなかった)。

だが、Vickeryの列挙型分類法という用語には、実は階層構造分類法の意味が含まれている。Vickeryは1955年の著作⁶⁾で列挙型分類法を「知識の樹」と呼んでいる。

伝統的な列挙型の分類法は、「[知識の]全領域」から始めて、それを一連のメインクラスに区分し、必要とされる詳細さが得られるまで区分を続けて、1つの巨大な知識の樹を構築することによって、属関係[類種関係]を正確に表示できるとみなしている。この区分の過程は論理的である、すなわち、各類は特定の区分特性によって種に区分される、ということが強調される。⁶⁾[p. 266-267]

これは階層構造分類法の説明そのものである。Vickeryにとっては、列挙型分類法と階層構造分類法は同義であるといえる。

第III章B節で見たように、Ranganathanが分析合成型分類法を考案したのは、複合的な主題に対応するためであった。Vickeryがファセット化分類法を提唱したのも、複合的な主題への対応が主な理由である。1955年の著作⁶⁾で次のように述べている。

ある論文の特定の主題は、知識の巨大なキャビネットの中の1つの整理棚に手際よくしまい込めるような、単純な概念ではない。それは、単純な概念の複合体であり、少なからず複雑である。⁶⁾[p. 264]

ここに出てくる「知識の巨大なキャビネット」とは先の引用の「知識の樹」のことであり、列挙型分類法(実際には階層構造分類法)では「概念の複合体」を扱うことが困難であると主張している。そして、既存の列挙型分類法(実際には階層構造分類法)では、複合的な概念を取り込んでいるために、もはや正しい階層構造になっていないことを指摘する。

主要な分類法の表を調べた結果、実際にはこれ[属関係の正確な表示]が真実ではないことが明らかとなった。…グループにまとめられている用語は、理論がそうあるべきだと主張しているようには関連していない。それらは、単一の特性によって類から分けられた

並列の種ではない。このように列挙型の分類表は用語間の正しい関係を表示することに失敗している。⁶⁾[p. 267]

単一の区分特性によって区分されれば、理論的には同じ特性をもつ用語のグループ（クラス）ができるはずである。しかし、既存の列挙型分類法（実際には階層構造分類法）のクラスには、1つの区分特性によって集められた用語ではなく、複数の区分特性によって分けられたものが混在しているのが現状である。そのために属関係が乱れ、階層構造分類法とはいえなくなっている、というのである。そこで、複数の区分特性によって分けられたものを、それぞれファセットとして仕分ける必要が出てくる。

ある類、たとえばメインクラス、の下にまとめられた用語は、すべてが単一の区分特性を用いた差異化によってその類から導かれたものとはいえない。それらは、それぞれ異なる特性によって類から導かれるグループまたはファセットに仕分けることができる。関連する用語のつながりを正確に表示するためには、ファセット化された分類表が必要である。⁶⁾[p. 263]

このようにして Vickery は、複合的な主題に対応するにはファセット化分類法が必要であることを主張した。

一方、複合的な主題に対応するには、独立要素から成る記号法が単一要素から成る記号法よりも優れていることを Ranganathan は認識していたが、Vickery もファセット化分類法が複合主題に対応しやすいことを記号の特性としてとらえている³⁴⁾。まず、記号を、(a) 意味的集合体 (semantic aggregates), (b) 膠着体 (agglutinates), (c) 融合体 (amalgamates), (d) 単離体 (isolates) の4種類に分ける。(a) の記号は「2つ以上の部分に分離することができ、各部分はそれぞれ自身の固定された意味をもつ。その意味は他の部分から分離されたときにも維持される」というもので、日常言語

の例として「milk-man, post-man, post-card」を、また、UDC の例として「547:541, 546:541, 546:545」をあげている。要するに、(a) はUDCのコロン連結である。コロンの前後の記号は独立していて、それぞれ自身の意味をもっている。また、それぞれ単独で使用することもできる。つまり、独立要素から成る記号法である。以下、詳しい説明は省略するが、(b) は補助表による合成で、前半の記号（たとえば 535）と後半の記号（たとえば 01）はそれぞれ独立した意味をもつが、後半の記号は単独で使用することはできない。(c) は階層性を表現した記号で、各桁の記号が階層の段階に対応した意味をもっている。列挙型分類法（実際には階層構造分類法）は伝統的にこの融合体の記号を使用していると指摘している。(d) はUDCには存在しない記号で、CC のフェイズ関係に対応する。

このように記号の種類を分け、それぞれに既存の分類法の記号法をあてはめている。そして、ファセット化分類法はもっとも柔軟性のある (a) の意味的集合体の記号法を採用しており、今後も発展する分類法であると指摘している。このように、記号の柔軟性が、列挙型分類法（実際には階層構造分類法）ではなくファセット化分類法を支持する理由としてあげられている。記号が柔軟であることによって、複合主題へも対応できることになるからである。

さらに Vickery は、「多くの場合においてこのこと [意味的集合体に関して成り立つこと] は膠着体にもいえるが、柔軟性は制限されている」³⁴⁾ [p. 19] と述べて、膠着体の記号は意味的集合体の記号のような柔軟性のある程度備えているが、限界があるとしている。すなわち、補助表などによる合成の機能では複合主題への対応に限界があるということである。このように、Vickery は独立要素から成る記号法と合成表示とを区別している。しかし、(a) の意味的集合体から (d) の単離体までの区分は一次的であり、構造-表示方法説の構造と表示方法という二次元的な区分にはなっていない。そのため、意味的集合体（独立要素から成る記号法）は構造面から見た場合の多次元構造（区分特性を独立に適用）に対応し、膠着

体（記号の合成）は表示方法の面から見た場合の合成表示に対応する、ということまでは認識していない。つまり、構造と表示方法との区別はできていない。

なお、この記号に関する著作の中でも日常言語の例があげられているが、Vickery は 17 世紀の言語学者 Wilkins の研究を考察した著作³⁵⁾で、以下のように述べている。

Wilkins の超越的接辞 (transcendental particles) は、合成型分類法 (synthetic classification), すなわち、基本用語の組み合わせによる複合的な観念の表現のたいへん興味深い例である。³⁵⁾ [p. 336]

文献分類法を学ぶ現代の学生にとって、Wilkins の仕事はいろいろな意味で非常に興味深い。(1) それは、基本用語の組み合わせによる特定主題の表現という、合成型分類法 (composite classification) の考えに基づいている。[(2) と (3) は省略]³⁵⁾ [p. 342]

このように、Vickery は記号の研究の基礎として言語学を考慮に入れている。意味的集合体（独立要素から成る記号法）と膠着体（記号の合成）との区別はその成果といえよう。それに対して Ranganathan は、独立要素から成る記号法は、ボルトとナットで部品を組み立てるメカノという玩具からヒントを得たと語っている¹⁴⁾。Ranganathan が直観で得た概念を、Vickery は理論的に探究したということであろう。両者の相違は、個人的属性、概念の提唱者と継承者、時代背景などの相違が影響しているように思われる。しかし、この点に関してはさらに研究が必要である。

V. ファセットと基本カテゴリー

A. Ranganathan

Ranganathan が 5 つの基本カテゴリー - Personality, Matter, Energy, Space, Time を初めて導入したのは、1944 年の著作¹⁶⁾である。こ

では、初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を想定していた。つまり、ファセットは領域によって異なり、初心者にとってはわかりにくい。特に、新しい領域でどのようなファセットが存在するかを分析するのは困難である。そこで、各領域に現れるファセットを整理してまとめたところ、5 つの基本カテゴリーに収められることがわかった。各領域でどの基本カテゴリーが必要かを示しておけば、基本カテゴリーに基づいてその領域で必要なファセットを見つけることが容易になるというわけである。

その後、Ranganathan はこの問題を継続的に検討し、上記の基本カテゴリーに与えた役割を変化させていく（途中の経緯については「ランガナータン論文」¹⁾を参照されたい）。その背景には、従来の単行書を中心とした図書館の蔵書だけでなく、科学技術文献を中心とした特定性が強く複合的な主題をもつ文献にも対応できる分類法の必要性の高まりがある。

新しい役割を明確に与えたのは、1951 年の著作³⁶⁾である。この著作では、分類法にとって硬直化が問題であることを指摘している。特定性が強く複合的な主題に対応するためには、より多くのファセットが必要である。しかし、多数のファセットをファセット式で固定すると硬直化が生じる。ここでファセット式とは、ファセットの順序を定め、各ファセット内の細目の記号を連結するための規則である。そこで、ファセット式で固定をするのは、個々のファセットではなく基本カテゴリーとする（そういう意味では「ファセット式」ではなく「基本カテゴリー式」と呼ばれるべきもの変わったのであるが、現在も「ファセット式」と呼ばれている）。基本カテゴリーは固定されるが、ファセットは基本カテゴリーから必要に応じて体现させればよい。こうすることによって自由度が得られる。

このように、それまで基本カテゴリーは初心者がファセット分析を行う際の手引きのような役割を与えられていたが、新しい考え方では、特定性が強く複合的な主題に対応するために多数のファセットをそこから体现させるという役割に転換さ

せられたのである。

B. Vickery

1. ファセットとカテゴリー

Vickery は ファセット を カテゴリー (Ranganathan の基本カテゴリーの意味ではない) という用語で置き換え、ほぼ同義として扱っている。以下にその例を示す。

したがって、Colon Classification における様々なカテゴリーあるいはファセットは、特定の順序で引用されなければならない。³⁴⁾[p. 23]

私たちがファセットと呼ぶ概念的カテゴリーが有効に適用できるのは、そのような用語の「因数分解」においてである。¹⁰⁾[p. 16]

「ほぼ同義」としたのは、下記のような使用例もあるからである。

これら 3つの情報源から全部で 18 のカテゴリーが得られた。後に、私はこれらのカテゴリーを 8つのファセットにまとめた。¹⁰⁾[p. 23-24]

この例のようにカテゴリーとファセットを使い分けている場合もあるが、大部分の場合において同義として扱っていると考えてよいであろう。

2. 一般分類法と共通ファセット

1952年のCRG設立以来、VickeryをはじめとするCRGのメンバーは、もっぱら専門分類法の構築を念頭においていた。それはかれらの多くが専門図書館員だったからであろう。Vickeryも化学関係の企業図書館に勤務していた。VickeryおよびCRGのメンバーが一般分類法への関心を表明したのは、おそらく、先述のDorking会議においてである。その会議での報告³⁷⁾でVickeryは次のように述べている。

[一般分類法への反発と特定の機関のための

専門分類法への需要の高まりがあるが]、しかし、より広い普遍的な分類法を求める声も、とりわけより包括的な図書館や書誌での利用に関して、依然として残っている。Classification Research Groupは、第一に、一般分類法を構築する目的は道理に適っているし実用的でもある、第二に、既存の分類法はどれも適切ではない、第三に、満足できる一般分類法は専門分類法を構築しようとする人の大きな助けとなるであろう、と信じている。³⁷⁾[p. 43]

ここでは、一般分類法は専門分類法を構築する際にも役に立つと述べている。ただし、既存の一般分類法ではなく、「満足できる」一般分類法が構築されたならばである。ここには、一般分類法の意義を認めることと、「満足できる」一般分類法でなければならないという慎重な態度との二面性が見られる。Vickeryのこの二面性はその後も継続される。たとえば、以下のように述べている。

詳細で、多様性があり、柔軟で、利用が簡単であるという現代の情報索引法が求めていることをすべて提供する一般分類法を設計することが可能であることは確かであろう。そのような一般分類法が提供されるまで、新しい専門分類法が構築されるであろう。⁸⁾[p. 7]

私はこの[一般分類法の目標は誤りであるという]見解に与しないが、もし一般的に役立つ分類法を構築するならば、広範囲で網羅的な文献の調査に基づかなければならないことを強調しておく。¹⁰⁾[p. 23]

そして、1962年の著作³⁸⁾では、満足できる一般分類法を構築するための条件を示している。

一般分類法は、単に専門分類法の集合体とすることはできない…。より満足のいく解決法は、[あるファセットの]単一の表を用意し、

必要ならば、その表から用語を取り出して他のファセットからの用語と結合できるようにすることである。³⁸⁾[p. 246]

そのような解決法は、全体として科学と技術のどのような主題でも表現するのに十分な、しかし重複は取り除いた、一組の同質のファセットを形成することが要求される。³⁸⁾[p. 246]

ここでは、満足できる一般分類法を構築するためには、専門分類法のファセットを寄せ集めるだけでは十分でなく、領域によらない「同質のファセット」を形成する必要があるとしている。なお、ここでの「一般分類法」は知識の全領域を対象としたものではなく科学技術の全領域を対象とした分類法という意味で使われている。

Vickery は、この「領域によらない同質のファセット」を「共通ファセット (common facets)」と呼んで検討している。では、何が共通ファセットになるのか。Vickery は次のように答えている。

最初に広く使われた共通ファセットは形式区分、時代区分、地理区分、言語区分である。これらは、大体において、基本クラスに関係なく、どの特定主題にも出現するファセットである。³⁹⁾[p. 8-9]

[CCにおいて] 多くの基本クラスに出現することのできるファセットは、どれも共通ファセットである。³⁹⁾[p. 8]

1つ目の引用にあるように、DDCなどの形式区分、時代区分、地理区分、言語区分を共通ファセットとみなしている。2つ目の引用にある「CCにおいて多くの基本クラスに出現することのできるファセット」は、Ranganathanの5つの基本カテゴリーのことではなく、たとえばEnergyファセット（この著作ではカテゴリーと呼ばずファセットと呼んでいる）に現れる

Measurement, Control, Moderationなどを指している。

別の著作³⁷⁾¹⁰⁾では、以下のような共通ファセットの例をあげている（ただし、知識の全領域ではなく、科学技術の全領域を対象としている）。

塑性限界は「変化量 (variation)」を示し、風化は速いまたは遅い「割合 (rate)」で生じ、注流はある「強さ (intensity)」で行われる。これらの一般的属性は知識のすべての領域に共通しているように思われる。³⁷⁾[p. 46-47]

科学と技術において有用なカテゴリーのいくつかの例はすでに第1章で示した、Substance, State, Property, Reaction, Operation, Device, Organ, Agent, Handling, Apparatus, Processなどである。¹⁰⁾[p. 22]

以上からわかるように、Ranganathanは基本カテゴリーP, M, E, S, Tを導入したときから一貫して同じものを使い続けているのに対して、Vickeryは著作によって何を共通ファセットとするかに変化が見られる。Vickeryの1957年の著作³⁹⁾では、Measurement, Control, Moderationという科学技術分野に共通のファセットのほかに、形式区分、時代区分、地理区分、言語区分という全分野に共通のファセットをあげている。1958年の著作¹⁰⁾では、Substance, State, Property, Reaction, Operation, Device, Organ, Agent, Handling, Apparatus, Processを、そして、1962年の著作³⁸⁾では、Variation, Rate, Intensityをあげている。一般分類法の意義を認めながらも「満足できる」一般分類法でなければならないという慎重な態度が、一般分類法を構築するための条件である共通ファセットの確定にも現れていると考えられる。

3. 共通ファセットの課題

ここで時間を少し戻して、一般分類法への関心を表明した1957年のDorking会議よりも前の

1955年の著作⁶⁾を見てみよう。そこでは以下のよう

に述べていた。

知識の全領域をカバーするのに必要なカテゴリーの数に制限を設けることができるかどうか、Classification Research Groupの中でいくらか議論がなされている。Colon Classificationでは、すべてのファセットが5つの「基本的」カテゴリー、すなわち、Personality, Matter, Energy, Space, Timeのどれか1つの体现であるとみなされている。私たちはこの見解を採用していない。私たちは、知識のどの領域にも現れるわずかな数の基本的カテゴリーだけが存在するに違いないとは仮定していない。それにもかかわらず、私たちは、ある領域を実際に調査することによって形成された一組の暫定的なカテゴリーを利用することは、他の領域にはじめてアプローチする際に役立つことを認識している。知識の成長に伴ってカテゴリーの組は修正される必要があるだろう。⁶⁾[p. 267]

ここでは、「わずかな数の基本的カテゴリーだけが存在するに違いないとは仮定していない」と述べている。この文中の「基本的カテゴリー」は、Ranganathanの5つの基本カテゴリーだけを指すのではなく、より一般的な意味で「知識のどの領域にも現れるカテゴリー」、すなわち、後に共通ファセットと呼ぶものを意味していると考えられる（そのため、あえて「基本的カテゴリー」と訳した）。そして、基本的カテゴリー（共通ファセット）の数が少ないことだけが問題なのではなく、固定をすることが問題だと述べていると思われる。それは、「知識の全領域をカバーするのに必要なカテゴリーの数に制限を設けることができるかどうか」についてCRGで議論がされていることや、「知識の成長に伴ってカテゴリーの組は修正される必要がある」点をあげていることから推測される。知識が変化し、領域ごとのカテゴリーの組が変化すれば、基本的カテゴリー（共通ファセット）も変化する可能性があり、数

を固定することはできないからである。

実は、Ranganathan自身も知識構造が静的ではないと認識していることを、Vickeryは1954年の著作⁴⁰⁾で指摘していた。

…Ranganathanは知識の全領域は静的ではないことを強調している。「それは動的な連続体である。したがって、その構造は常に変化している。それゆえ、現時点での構造を知るだけでは十分ではない。私たちはその展開の様式も理解するべきである」。⁴⁰⁾[p. 140]

しかし、それにもかかわらずRanganathanは基本カテゴリーを5つに固定している、というのが先の1955年の著作⁶⁾での批判である。

このように、1957年のDorking会議よりも前の段階では、共通ファセットに関して懐疑的な見解をもっていた。一般分類法の意義を認めるようになってから後も慎重な態度をとっていたのは、一般分類法構築の条件である共通ファセットへの懸念があったからではないかと思われる。

実際、1957年以降もRanganathanの基本カテゴリーには批判的である。1975年の著作¹¹⁾でも、以下のように述べている。

知識の、あるいは、科学と技術のどの領域にも適用できる、「基本的 (fundamental)」カテゴリーの簡潔で、表面的には (ostensibly) 完全なリストを作成する試みがなされてきたし、いまもなされている。たとえば、Ranganathanは5つの基礎的な (basic) カテゴリー、「personality」、「energy」、「matter」、「place」[原文通り]、「time」だけを認めている。¹¹⁾[p. 17-18]

ここでは、「表面的には完全なリスト」と呼んで、Ranganathanの5つの基礎的なカテゴリー（基本カテゴリー）を例にあげている。これは、5つの基本カテゴリーでは「完全なリスト」になっていないことを指摘している。

共通ファセットが解決すべき課題は、変化を続

ける知識構造に対して共通ファセットの完全なリストが作成できるのか、という問題だけではない。多くの領域に共通するように思われるファセットでも領域によって扱いが異なる場合もある、というもう1つの課題を Vickery は指摘している。

…Dewey と Bliss によって与えられたかなりの数の多重配置 (multiple locations) は、ファセット化分類法においては必要がない。その一方で、用語の属関係は変動しないという仮定は、十分な調査をしないで性急に採用すべきではない。¹⁰⁾ [p. 38]

したがって、伝統的な分類法における多重配置の多くの例が必要でないとしても、ある概念の属関係が変動する場合には複数の階層にそれらが現れることを正当化する。¹⁰⁾ [p. 39]

上記の最初の引用では、ファセット化分類法であるならば、同じ内容を表す項目はファセットとしてまとめられており、同じ項目を複数箇所に配置 (多重配置) する必要はないのだが、同じ内容を表す項目であっても、上位と下位の関係が変われば位置づけも変わる可能性がある、ということを述べている。その例として動物をあげている。動物の種類は、動物学にも農業にも出現するが、農業における動物は家畜としての動物であり、動物学としての動物とは扱いが異なる、というわけである。このことから、2つ目の引用で、同じ内容を表す項目であっても、複数箇所に出現する可能性があると結論づけている。このような項目は共通ファセットにはならない、ということである。

上位と下位の関係 (属関係) 以外にも、同じ項目が異なる扱いを必要とする場合がある。それは次の場合である。

ある知識領域において補助的なファセット (航空学における物質の Property のように) が、他の領域 (この場合は物理学) において

は中心的である、ということは容易にわかる。この事実は、科学と技術全体の一般分類法の設計をしようとする際に大きな困難をもたらす。³⁸⁾ [p. 245]

索引語として付与する際に、同じ語であっても、ある領域では主要な索引語として扱われるが、別の領域ではあまり重要ではない索引語として扱われる可能性がある、ということである。このような場合も、共通ファセットとすることは困難である。

Vickery は、一般分類法を構築するには以上のような共通ファセットの課題を解決する必要があると指摘している。

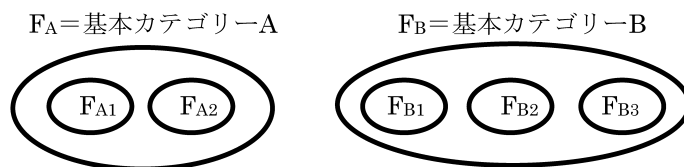
C. 基本カテゴリーと共通ファセット

B 節 3 項で見たように、Vickery は Ranganathan の基本カテゴリーに対して批判的であるが、それは B 節 2 項で見た一般分類法構築への慎重な態度によるものだけでなく、そもそも Vickery の共通ファセットと Ranganathan の基本カテゴリーはまったく異なる概念であるということも関係していると思われる。

Ranganathan の基本カテゴリーは、最上位のファセットと思われる⁴¹⁾。ファセット F_{A1} と F_{A2} が共通の特性によってファセット F_A にまとめられ、ファセット F_{B1} , F_{B2} , F_{B3} が共通の特性によってファセット F_B にまとめられたとする (第 5 図)。そして、ファセット F_A と F_B に共通の特性がないならば、 F_A と F_B がそれぞれ最上位のファセットとなる。これが Ranganathan の基本カテゴリーではないかと考えられる。

各基本カテゴリーに属する個々のファセットは、特定の知識領域にだけ現れるものもあれば、多くの知識領域に現れるものもあるであろう。しかし、多くの知識領域に現れるから基本カテゴリーと呼ばれるのではない。どの知識領域に現れるかにかかわりなく、共通の特性をもつ最上位のファセットが基本カテゴリーである。

たとえば、国立図書館、公共図書館、大学図書館、学校図書館などの「館種」ファセットは図書



第5図 Ranganathan の基本カテゴリー

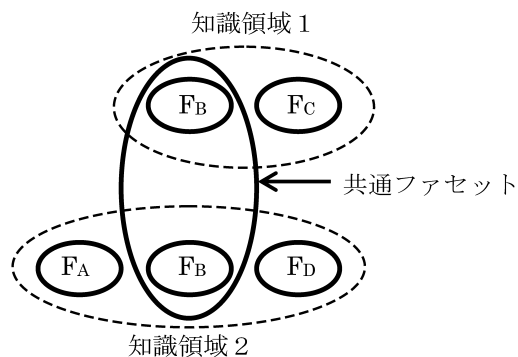
館学分野にしか現れず、ヘリウム、ネオン、アルゴンなどの「元素」ファセットは化学分野にしか現れないとする。しかし、「館種」ファセットと「元素」ファセットとの間に「パーソナリティ」という共通の特性があるならば、両者は Personality ファセットという上位のファセットにまとめられる。そのほかに、Matter ファセットや Energy ファセットが上位のファセットとしてまとめられて、これらの上位ファセットの間にこれ以上共通の特性がないならば、これらが最上位のファセットとなる。そして、この最上位のファセットが Ranganathan の基本カテゴリーであると考えられる。

それに対して、Vickery の共通ファセットは、多くの知識領域に現れるファセットを意味している。第6図のように、知識領域1にファセット F_B と F_C が現れ、知識領域2にファセット F_A , F_B , F_D が現れるとき、両方の知識領域に共通して現れるファセット F_B が共通ファセットと呼ばれる。

たとえば、「速度」ファセットは、物理学分野（物体の運動速度）、化学分野（化学反応の速度）、生物学分野（植物の生長速度）、天文学分野（天体の自転・公転速度）、電気工学分野（電流の伝達速度）などさまざまな分野に現れるが、「遺伝子」ファセットは生物学分野にしか現れないであろう。前者のように多くの領域に共通して現れるファセットが Vickery の共通ファセットである。

このように、Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセットは、一見、同じ概念に思えるが、実際はまったく異なる概念と考えられる。

第IV章B節1項で、Ranganathan が自身の提唱する分析合成型分類法と Vickery らのファセット化分類法の違いにこだわった理由の1つ



第6図 Vickery の共通ファセット

は、それぞれの分類法が基礎としている基本カテゴリーと共通ファセットの違いにあったと述べた。Ranganathan が苦心の末に与えた基本カテゴリーの役割によれば、基本カテゴリー自体はファセット式で固定されるが、個々のファセットは必要に応じて基本カテゴリーから体现されることによって硬直化が防げる、ということであった（A節参照）。しかし、Vickery の共通ファセットは、多くの知識領域に出現するとはいえ、個々のファセットそのものであり、基本カテゴリーの役割を果たすことはできない。Ranganathan がここまで明確に認識していたかは定かでないが、少なくとも共通ファセットは基本カテゴリーと異なる概念だと感じ取っていたと思われる。

それに対して Vickery は、B節3項の引用で見たように、「どの領域にも適用できるカテゴリーのリストを作成する試み」として Ranganathan の基本カテゴリーをあげていることから推測されるように、基本カテゴリーも共通ファセットの一種である（ただし不完全な）と考えていたと思われる。これが、Vickery が Ranganathan の基本カテゴリーに対して批判的であったもう1つの理

由と考えられる。

VI. おわりに

本稿では、Ranganathan のファセット概念に関する考えの変遷を著作ごとに逐次的に調査した「ランガナータン論文」¹⁾をもとに、筆者の提唱する構造-表示方法説の観点から再分析を行った。また、現在の分類論や組織化論のテキストブックにおけるファセット概念の記述に Ranganathan とともに影響を与えたと思われる Vickery の考えを、Ranganathan と対比させながら検討した。

Ranganathan のファセットとは「区分特性によってできる区分肢の総体」であり、それ自体は単純な概念である。しかし、ファセット概念が適用された CC において、独立要素から成る記号法も導入されたため、ファセットを用いることと独立要素から成る記号法を用いることが一体化してとらえられてしまった。さらに、独立要素から成る記号法と記号の合成も互いに異なる概念であるにもかかわらず、独立要素から成る記号法において記号を組み合わせることが記号の合成と似ているためか、両者が混同されてしまった。

構造-表示方法説に基づけば、独立要素から成る記号法は構造という観点から見た多次元構造分類法（区分特性を独立に組み合わせる分類法）のための記号法であり、記号の合成は表示方法の観点から見た合成表示のことである。両者はまったく異なる観点から見た概念である。また、ファセットは独立要素から成る記号法をもつ分類法、すなわち多次元構造分類法だけで使われるものではなく、階層構造分類法でも使うことが可能であるし、実際に使われている。現在のテキストブックでは構造-表示方法説に基づく整理がほとんど行われておらず、Ranganathan の時代からの混乱がそのまま引き継がれている。

Ranganathan の分析合成型分類法と Vickery らのファセット化分類法も、現在のテキストブックでは同義として扱われることが多い。しかし、Ranganathan 自身は同義ではないとして、両者の相違を明確にしようとしていた。それに対し Vickery は、両者を同義として扱っていた。

現在のテキストブックにおける両分類法の関係に関する記述は、Vickery の影響が強いと考えられる（もちろん、Vickery 以外の CRG メンバーや他の人たちの影響も相乗的であったと思われる）。

さらに、分析合成型分類法とファセット化分類法が同義であるかは別として、どちらも複合的な主題に対応するために記号の独立性を重視している点では多次元構造分類法（区分特性を独立に組み合わせる分類法）を意図していると思えるが、その一方で、どちらも列挙型分類法と対置されている点で、構造-表示方法説から見て問題がある。構造-表示方法説では、列挙型分類法（列挙表示の分類法）に対置されるのは合成表示の分類法である。ここにも、独立要素から成る記号法と記号の合成との混同の影響が見られる。

ただし、Vickery は列挙型分類法と呼びながらも実際には階層構造分類法を意図していたようにも思える（Ranganathan についてははっきりしない）。そうだとすれば、階層構造分類法に対置されるのは多次元構造分類法であり、ファセット化分類法に関しては適切な対応関係になっているといえる。とはいえ、実質的に階層構造分類法であるものを列挙型分類法と呼んでいるということは、両者を混同しているのであり、それ自体も問題であるし、それに対置されるファセット化分類法が純粋に多次元構造分類法を意図しているのか疑問である。

なお、分析合成型分類法という名称は、階層構造分類法でも使われている（記号の）合成という語を含んでいるし、ファセット化分類法という名称は、階層構造分類法でも使われているファセットという語を含んでいるので、区分特性を独立に組み合わせる分類法という意味での多次元構造分類法を指す名称としては適切でないと思われる（最近では、筆者自身が提唱した多次元構造分類法よりも、「独立」という語を含む名称がより適切ではないかと考え始めている）。

最後に、Ranganathan におけるファセットと基本カテゴリーの関係、および、Ranganathan の基本カテゴリーと Vickery の共通ファセット

の関係について検討した。Ranganathan は、当初は分類作業の初心者のための手引きという役割を基本カテゴリーに与えていた。しかし、知識の専門化に伴って文献の主題も複雑化し、それを表現するファセットの数も増加したため、それらをファセット式で固定すると分類法が硬直化する問題が生じた。この問題を解決するために、ファセット式で固定するのは基本カテゴリーとし、個々のファセットは必要に応じて基本カテゴリーから体现させるという方法に変えた。基本カテゴリーは固定されるが個々のファセットは束縛されないで、分類法の硬直化が防げる。この場合、基本カテゴリーは初心者のための手引きではなく、個々のファセットを体现する源という役割に変換されたことになる。

一方、Vickery はもともと専門分類法にだけ関心をもっていたが、一般分類法にも関心を示すようになる。しかし、CC を含めて既存の一般分類法には否定的であった。また、満足できる一般分類法を構築するためには、多くの(理想的にはすべての)知識領域に共通するファセットが必要であると考えていた。こうした観点から、共通ファセットに関する考察を行っている。

このVickeryの共通ファセットはRanganathanの基本カテゴリーと類似しているようにも思われるが、実際にはまったく別の概念である。基本カテゴリーは同じ区分特性をもつファセットをまとめたもの(最上位のファセット)である。それに対して共通ファセットは、多くの知識領域に出現するとはいえ、個々のファセット自体である。

したがって、共通ファセットでは個々のファセットを体现させるという基本カテゴリーの役割を果たすことができない。Ranganathan が自身の分析合成型分類法とファセット化分類法との違いにこだわった1つの理由は、この基本カテゴリーと共通ファセットの違いにあると考えられる。このことから、Ranganathan とVickery は似たような分類法を研究・構築しているけれども、目指す方向はかなり異なっていたと思われる。

謝 辞

筑波大学図書館情報学図書館には資料入手でお世話になりました。また、査読者の方々には多くの非常に重要な指摘を頂きました。皆様に深くお礼申し上げます。なお、本研究は筑波大学の2012年度サバティカルを取得して行ったものです。

注・引用文献

- 1) 緑川信之. ランガナータンにおけるファセット概念の展開. *Library and Information Science*. 2013, no. 69, p. 47-81.
- 2) 緑川信之. 分類法の構造: 階層構造と多次元構造. *図書館学会年報*. 1996, vol. 42, no. 3, p. 99-110.
- 3) Spiteri, L. A simplified model for facet analysis: Ranganathan 101. *Canadian Journal of Information and Library Science*. 1998, vol. 23, no. 1/2, p. 1-30.
- 4) Vickery, B. C. Classification Research Group. *Library Association Record*. 1953, vol. 55, p. 187-188.
- 5) Vickery, B. A Long Search for Information. Board of Trustees of the University of Illinois, 2004, 33p.
- 6) Classification Research Group. The need for a faceted classification as the basis of all methods of information retrieval. *Library Association Record*. 1955, vol. 57, no. 7, p. 262-268.
- 7) Foskett, D. J. Brian Vickery: A personal memoir. *Journal of Documentation*. 1988, vol. 44, no. 3, p. 199-204.
- 8) Vickery, B. C. Faceted Classification: A Guide to Construction and Use of Special Schemes. *Aslib*, 1960, 70p.
- 9) Vickery, B. C. Faceted Classification Schemes. Rutgers University Press, 1966, 108p.
- 10) Vickery, B. C. Classification and Indexing in Science. Butterworths, 1958, 185p.
- 11) Vickery, B. C. Classification and Indexing in Science. 3rd ed., Butterworths, 1975, 228p.
- 12) Ranganathan, S. R. Colon Classification Ed 7 (1971): A Preview. *Sarada Ranganathan Endowment for Library Science*, 1969, 52p.
- 13) 谷口祥一, 緑川信之. 知識資源のメタデータ. *勁草書房*, 2007, 248p.
- 14) Ranganathan, S. R. Colon Classification. *Madras Library Association*, 1933, 3 pts. in 1 v.
- 15) Ranganathan, S. R. Colon Classification. 2nd ed., *Madras Library Association*, 1939, 4 pts. in 1 v.

- 16) Ranganathan, S. R. *Library Classification: Fundamentals & Procedure, with 1008 Graded Examples & Exercises*. Madras Library Association, 1944, 496p.
- 17) Ranganathan, S. R. *Colon Classification*. 3rd ed., Madras Library Association, 1950, 4 pts. in 1 v.
- 18) メインクラスの下位クラスをカノニカルクラス (canonical class) と呼ぶ。カノニカルクラスは従来の学問分野を指す Ranganathan の用語である。
- 19) 緑川信之. ファセット概念の源流. *日本図書館情報学会誌*. 2013, vol. 59, no. 1, p. 17-31.
- 20) Dewey, M. A. *Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the Books and Pamphlets of a Library*. Melvil Dewey, 1876, 44p.
- 21) British Standards Institution. *Universal Decimal Classification: Complete English Edition, Fourth International Edition*. British Standards House, 1943, Volume 1, Part 1.
- 22) Synthetic という用語はもともと Bliss が使っていたものを Ranganathan が誤った使い方で借用した、と Bliss が主張していることについては、ランガナータン論文¹⁾で言及した。
- 23) Ranganathan, S. R. *Prolegomena to Library Classification*. Madras Library Association, 1937, 305p.
- 24) Ranganathan, S. R. Self-perpetuating scheme of classification. *Journal of Documentation*. 1949, vol. 4, no. 4, p. 223-244.
- 25) Ranganathan, S. R. *Classification, Coding and Machinery for Search*. UNESCO, 1950, 58p.
- 26) Ranganathan, S. R. "Library classification as a discipline". *Proceedings of the International Study Conference on Classification for Information Retrieval held at Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib, 1957, p. 3-14.
- 27) Ranganathan, S. R. *Prolegomena to Library Classification*. 2nd ed., Library Association, 1957, 487p.
- 28) Ranganathan, S. R. "Library classification on the March". *Essays in Librarianship in Memory of William Charles Berwick Sayers*. Foskett, D. J.; Palmer, B. I., eds., Library Association, 1961, p. 72-95.
- 29) Ranganathan, S. R. "General and special classifications". *Classification Research: Proceedings of the Second International Study Conference held at Hotel Prins Hamlet, Elsinore, Denmark 14th to 18th September 1964*. Atherton, P., ed., Munksgaard, 1965, p. 81-93.
- 30) Ranganathan, S. R. *The Colon Classification*. Rutgers University Press, 1965, 298p.
- 31) Ranganathan, S. R. *Prolegomena to Library Classification*. 3rd ed., Asia Publishing House, 1967, 640p.
- 32) Vickery, B. C. The structure of a connective index. *Journal of Documentation*. 1950, vol. 6, no. 3, p. 140-151.
- 33) Vickery, B. C. Systematic subject indexing. *Journal of Documentation*. 1953, vol. 9, no. 1, p. 48-57.
- 34) Vickery, B. C. Notational symbols in classification. *Journal of Documentation*. 1952, vol. 8, no. 1, p. 14-32.
- 35) Vickery, B. C. The significance of John Wilkins in the history of bibliographical classification. *Libri*. 1953, vol. 2, p. 326-343.
- 36) Ranganathan, S. R. "Colon Classification and its approach to documentation". *Bibliographic Organization: Papers Presented before the Fifteenth Annual Conference of the Graduate Library School, July 24-29, 1950*. Shera, J. H.; Egan, M. E., eds., University of Chicago Press, 1951, p. 94-105.
- 37) Vickery, B. C. "Relations between subject fields: Problems of constructing a general classification". *Proceedings of the International Study Conference on Classification for Information Retrieval held at Beatrice Webb House, Dorking, England, 13th-17th May 1957*. Aslib, 1957, p. 43-49.
- 38) Vickery, B. C. *Classification for documentation*. Aslib Proceedings. 1962, vol. 14, no. 8, p. 243-247.
- 39) Vickery, B. C. Depth classification. 24: Common facets and relations. *Annals of Library Science*, 1957, vol. 4, no. 1, p. 8-12.
- 40) Vickery, B. C. The changing structure of knowledge. *Annals of Library Science*. 1954, vol. 1, no. 3, p. 137-147.
- 41) 論理学では、1つの区分特性によってできる区分肢群をクラスと呼んでいる⁴²⁾。Ranganathan のファセットは、区分特性によってできる区分肢の総体であるから、クラスといえるであろう。さらに、区分肢の総体であるクラスは外延であり、そのクラスを特徴づける区分特性は内包である⁴²⁾。したがって、クラスに該当するファセットは外延である。Ranganathan は、CC 第1版¹⁴⁾では内包である区分特性を使用した¹⁴⁾が、CC 第3版¹⁷⁾では外延であるファセットに変更したことになる⁴³⁾。また、個別の対象を区分特性によってまとめてクラスを構成し、さらに、共通の特性をもつクラスをまとめて上位クラスを構成し、この過程を続けていくと、もはや他のものの下位ク

ラスになりえない最上位のクラスに到達する。この最上位のクラスを範疇 (category) と呼ぶ⁴²⁾ (Ranganathan の基本カテゴリーや Vickery がファセットとほぼ同義に用いているカテゴリーと紛らわしいので、あえて範疇という語を用いることにする)。範疇 (最上位のクラス) 間にはもはやなんの共通の特性もない (もし共通の特性があるなら、さらに上位のクラスにまとめられる)。Ranganathan の基本カテゴリーは、本文のこの後で説明するように、最上位のファセット、すなわち最上位のクラスであるから、範疇に該当するといえる。ただし、Ranganathan が基本カテゴリーを導く際に、上位に向けて何段階もファセットをまとめているのか定かでない (下位に向けてファセットが階層性をもっていることは、ファセットを構成する際に1つの区分特性ではなく「区分特性の系列 (train of characteristics)」を適用していることからわかる¹⁾)。その意味で、範疇と基本カテゴリーが完全に同じ意味をもっているとは言い切れない。

42) 近藤洋逸, 好並英司, 論理学概論. 岩波書店,

1964, 295p.

43) 区分特性とファセットの関係を内包と外延の関係とみなすことについては、以前の論文⁴⁴⁾でも指摘した。ただし、最近では厳密に内包と外延の関係と呼べるのか疑問も感じている。同じ区分特性によるファセットでも、知識領域によって異なる細目となるからである。たとえば、図書館学における問題ファセットには「書庫, 目録室, 閲覧室」などの細目が含まれているが、他の領域の問題ファセットにこれらの細目が含まれることはないであろう。したがって、同じ問題特性によるファセットでも「外延」が異なることになる。また、Vickery が指摘していたように (第V章B節3項参照), 同じ動物の種類でも、農業における家畜としての動物と動物学における動物とは異なる細目があげられている。これも外延が異なるといえる。この問題についてはさらに検討の必要がある。

44) 緑川信之. 分類法におけるファセット概念の検討. 図書館学会年報. 1997, vol. 43, no. 3, p. 117-128.

要 旨

【目的】 本研究では、(1) Ranganathan の提唱した「ファセット」概念とは何か、(2) Ranganathan と Vickery は分析合成型分類法とファセット化分類法の間をどのように考えていたのか、(3) Ranganathan と Vickery はファセットと基本カテゴリー (または共通ファセット) の関係をどのようにとらえていたのか、の3点に関して、構造-表示方法説の視点から分析した。

【方法】 筆者は以前の論文で、Ranganathan の著作を逐次的に調査した。本稿では構造-表示方法説に基づいて前稿の結果の再分析を行った。構造-表示方法説では分類法の2種類の分け方を区別する。1つは構造面から階層構造分類法と多次元構造分類法に分け、もう1つは表示方法から列挙表示の分類法と合成表示の分類法に分ける、というものである。また、Ranganathan との比較を行うために、やはり構造-表示方法説に基づいて Vickery の著作を調査した。

【結果】 Ranganathan のファセット概念自体は「区分肢の総体」という単純なものである。しかし、Colon Classification においてファセット概念とともに「独立要素から成る記号法」も導入されたため、ファセットを用いることと独立要素から成る記号法を用いることが一体化していると誤解されてしまった。また、独立要素から成る記号法も「分類記号の合成」と混同されてしまった。これら3つの概念は構造-表示方法説に基づけば明確に区別すべきである。これらの混乱が、Ranganathan の後の著作や Vickery の著作全体に影響を与えた。